



OU Shougan

王 小晗 氏

【Profile】

2012年3月 教育学部人間発達科学科卒業。

電気機器メーカー 一般職。

日本文化に関心を持ち、中国から2007年来日しました。教育の国際比較や生涯教育など、幅広い領域を学べる教育学部のカリキュラムに魅力を感じて受験しました。入学後、言語の壁に苦勞しましたが、同級生やチューター(学習・日常生活のサポーター)がいつも助けてくれました。

2012年取材

学部ではどんなことを学びましたか？

教育学部では、社会教育学、職業・キャリア教育学、教育行政学、比較教育学(教育の国際比較)など様々な領域を学びました。その中でも特に興味を持ったのがキャリア教育です。卒業後は日本での就職を考えていたので「日本企業で働く外国人が抱える課題」を卒業論文のテーマにしました。日本で働く中国人にインタビューすると、「電話対応が上手くできない」「職場内でコミュニケーションが取れない」など、外国人がつかずきやすい問題が浮き彫りになりました。日本企業でのマナーやルールを学ぶ機会にもなったと思います。

日本の大学に入学してどんな苦勞がありましたか？

入学後に一番苦勞したのは、専門用語ばかりの講義でした。最初の数ヶ月は、講義内容をほとんど理解できませんでした。そんな私にとって、留学生支援制度はとても心強い制度でした。特に、週1回程度、勉強や日常生活のサポートをしてくれる学生のチューター(主に3、4年生や大学院生)には、様々な相談をしました。

現在の仕事について教えてください。

電気機器メーカーで、電話対応や注文書の処理などを行っています。こうした日常業務の他、製品を世界展開するためのプロジェクトチームにも入っています。中国人ならではの感覚を期待されて、メンバーに選ばれました。マーケット調査やユーザーの満足度調査、共同開発している大学とのやり取りなど、やりがいのある仕事ばかりです。故郷の中国で自社製品を広めるプロジェクトに関われることを嬉しく思っています。

大学での経験は仕事で生かされていますか？

卒業論文での調査は、社会人になる前の良い予習になりました。言語の問題や文化的な問題など、外国人が日本企業に馴染むまでのハードルを知っていたおかげで、今の職場にもスムーズに慣れることができました。卒業論文制作中の「コミュニケーションだけでなく、日本の企業文化についても調べてみなさい」という指導教員のアドバイスを参考にして良かったです。社会に出てからも役立つ知識を身につけることができました。